

大山寺僧坊跡発掘調査成果VI

神仏混合のお寺・大山寺

現在、大山寺と大神山神社は別々の宗教団体ですが、もともとは大山寺という一つの修験道のお寺でした。現在のようになつたのは、大山寺の歴史から見れば、比較的最近のことです。明治8年の神仏分離令発布によって、大山寺号が廃絶し、大神山神社に神道が引き継がれ、明治36年に大山寺が復興された以降に現在の形になりました。今から百年あまり前の出来事です。

では、それ以前の姿はどのようなものであったのでしょうか。

当時の日本の社会では、寺と神社の区別は今のようにはっきりしていませんでした。神社に付属する寺や寺に付属する神社などがあり、寺で神を祀ったり、神社でも仏を祀ったりしていました。このような状況の背景には、仏が神に姿を変え、という「本地垂迹」思想やその逆の「神本仏迹」思想がありました。大山寺も、現在の大神山神社奥宮で、大智明大権現に姿を変えた地藏菩薩をお祀りしていました。簡単にいえば、神も仏も一緒にして信仰していたのです。これが日本人特有のカミ観念であり、非常に柔軟な信仰を持っているといわれるところです。現

在でも、正月の初詣に神社、お盆とお彼岸にはお寺へ行くなど、神と仏の両方を拝む人は一般的に見られます。また、クリスマスに教会を訪れる人もいます。

検出した方形石組み遺構について

僧坊跡南辺の真ん中辺りで、長方形形状の石組み遺構を検出しました。当教育委員会ではこれを「方形石組み遺構」と呼んでいます。この遺構は拳大（こぶし）人頭大の



自然石を、長方形に乱雑に積み上げたもので、規模は長辺2.2m、短辺1.9mを測り、遺構の周りには小さな柱穴が石組みを取り囲むようにして検出されました。時期は、15世紀ごろと考えています。位置的には、この僧坊の中心的建物の裏側に当たります。この遺構の性格はどのようなものでしょうか？

全国の類例との比較から

①県内では日野郡日南町霞寺ケ字根遺跡から、一辺約2m、高さ約0.8m、三段積みの石積基壇が一基検出されています。

す。この上に宝篋印塔が建てられていたため、墓であると考えられています。時期は15世紀ごろです。

②香川県まんのう町に所在する中寺廃寺跡では、規模が一辺1.27m前後、高さ1.4段に積み上げた方形の石組み遺構が16基検出されています。時期は10世紀前半です。

③熊本市池上町に所在する池辺寺跡では、規模が一辺2.4mの方形の石組みが10列×10基の整然と並んだ状態で検出されています。時期は9世紀ごろです。

②・③は石塔の基礎であるという例で、文献から、石塔を築くのは延命攘災や滅罪招福を得られるという民間信仰によるものと想定されています。

これらと大山寺の方形石組みを比べると、その形や規模がよく似ており、当遺構でも石塔や墓が建っていたとも考えられます。

しかし、①・③の例とは時期が異なることや、僧坊の中心建物に付随するような場所で検出されている点において異なります。これはどうしてなのでしょうか？

文献から考えてみて

寛政九年（1797年）片山楊谷絵図では、釈迦堂の裏手に山神社と書かれた建物が描かれています。ほかに、阿弥